

# リチャード・ローティの ネオ・プラグマティズムについて

能 藤 隆 正

## 1. はじめに

本稿は、アメリカの哲学者で、「ネオ・プラグマティズム」の旗手と目されるリチャード・ローティの哲学的思想を、批判的に検討することを目的に整理を試みたものである。

ローティは、彼の主著である『哲学と自然の鏡』（1979）での論説を中心とした議論の中で、伝統的な認識論哲学への批判をした後「哲学の終焉」を示唆したが、これには大きな賛否両論が唱えられた。これ以降、『哲学と自然の鏡』で展開された方針を軸に、ローティは様々な議論を行う。多岐に亘る議論の中で、特にローティに対する批判として目立つのは、彼の真理観へのものである。ローティは、「哲学の終焉」を迎えた後、これまで伝統的な西洋哲学が探求の対象としてきた「真理」や「客観性」、何らかの实在、もしくは「経験」などの諸概念をことごとく斥け、その代替案として、自分が現在置かれている「今・ここ」から、自分の属している共同体内において、終わりのない「会話」を続けていくという自文化中心主義を提案する。こうした思想について、ファシズムなどの避けるべき思想に対しても、自文化と異なるという非常に弱い主張以外の何もできなくなってしまうという批判や、絶対性はないと言っておきながら自身の思想だけは例外である、というような態度への批判など、多く寄せられた。ローティが批判するような絶対主義は採れないにしても、ローティが主張するほど極端な相対主義的立場を採るべきなのだろうか。

今なお、分析哲学において批判の対象としてやり玉にあげられることの多

いローティであるが、今一度ここで、ローティを批判的に検討するために彼の思想を整理することが本稿の目的である。ローティの思想を全体的に研究したものとしては、[大賀 2009] や、[富田 2016]、[渡辺 1999] などがある。本稿は、これらの先行研究を踏まえ、現在、分析哲学の領野において、盛んに試みられている、ローティの採る相対主義的な立場と、ローティが批判する絶対主義的な立場のどちらでもない第3の道を模索する試みを評価する前準備として、ローティの思想の全体的な整理を試みる。

## 2. ローティのプラグマティズムについて

ローティはプラグマティストを自称し、一般的にローティの思想は「ネオ・プラグマティズム」と呼ばれている。ローティの思想をまとめるにあたり、彼の主著である『哲学と自然の鏡』の議論に基づいて、まず「ネオ・プラグマティズム」についてみていく。

### 2.1. 認識論的転回

ローティは『哲学と自然の鏡』の中で、「認識論哲学の伝統」に対して批判から論を始める。ローティは、西洋哲学史上、思想潮流は幾度かの「転回」、すなわち大規模な方向転換を迎えたとみている。ローティは初めて起こった転回を「認識論的転回」とよんでいる。西洋哲学は、プラトン、アリストテレスのギリシア哲学に起源をもっている。ギリシア哲学は、「イデア」という概念に代表されるような「普遍的なもの」を「観照 (theoria)」することを哲学の目的とし、その形而上学的、存在論的な要素はキリスト教神学を経て、デカルトまで継承された<sup>1)</sup>。ローティは、デカルトが認識論的転回のきっかけをもたらしたとみる。具体的には、デカルト以前は「普遍的なもの」や「永遠にして不変なるもの」の存在が、探求の主題とされてきたのに対し、デカルト以後は「〈普遍的なものや永遠・不変の存在〉というものをわれわれは、いかにして客観的に認識することができるのか<sup>2)</sup>」という形で、存在論から認識論へと、探求の主題が変化したのである。ローティいわく、認識論的

回の流れは、

われわれは「心的過程」の理解に基づいた「知識論」という概念を(…)わけてもロックに負っている。また、諸々の「過程」がそこで生起する独立の実体としての「心」という概念を、(…)とりわけデカルトに負っている。さらに、ほかの文化諸領域が行う資格請求を支持したり却下したりする純粋理性の法廷としての哲学という概念を、(…)とりわけカントに負っている(…)<sup>3)</sup>

という。デカルト以後、ロックとカントによって引き継がれた「認識論」<sup>4)</sup>には、ギリシア以来の哲学と、ある共通項があった。「人間の鏡(ガラス)のような本質(Our Glassy Essence)<sup>5)</sup>」をわれわれは持っているというイメージである。カントによって「自然〔本性〕の鏡<sup>6)</sup>」という、われわれの心的過程を基礎づけてくれるものというイメージが完成された。「精神」や「心」、「純粋理性の法廷」などの、認識論哲学にみられる心身二元論の、二元論のうち的一方がもう一方を基礎づけているという確信が形成された<sup>7)</sup>。

## 2.2. 言語論的転回

こうした認識論的哲学にみられる表象主義の抱えてしまう基礎づけ主義は、フレーゲ、ラッセルに起源をもつ英語圏の哲学を発端とした、分析哲学から鋭く批判された。こうした分析哲学による批判の運動を、ローティは「言語論的転回」と呼んだ。大賀によると、「言語論的転回」を経た言語哲学と呼べるのは、「フレーゲ、ラッセルを継承し、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』に影響を受けた『論理実証主義』と、その批判を行うことによって発展したクワインやデイヴィッドソンらのプラグマティックな言語哲学(…)」と、そのほかに後期ウィトゲンシュタインの『哲学的探究』やギルバート・ライルに影響を受けた「日常言語学派」などであるという<sup>8)</sup>。

ローティは、「言語哲学」を2つに分ける。一つは、「フレーゲによって指摘され、ついで例えばウィトゲンシュタインの『論考』やカルナップの『意味と必然性』で議論された一群の問題<sup>9)</sup>」を源泉とするものであり、もう一

つは「カントが抱いていた哲学像——すなわち、知識論という形で、永遠にして非歴史的な枠組を科学的探究に与える哲学という描像——を温存しようとする<sup>10)</sup>」、ローティが言う意味での認識論的な流れを源泉とするものである。前者は、特権的表象を「言葉」に挿げ替えただけであり、それは同時に後者の基礎づけという、「真理とは何か」などの問いを、自然科学の発達に伴って、「われわれは『真理』を普遍的に認識することができるのか」——すなわち、自然科学が外的世界を探求した結果、知識として提出してくるものに対して、哲学はわれわれの認識能力を探求の対象とすることで、いかにして基礎づけを与えることができるのか——という形に変化させたものであるという。こうすることで、自然科学やその他の学問に対して、哲学は基礎づけを与える学問としての地位を維持することに成功した。言語哲学は、認識論のもっていた「特権的な表象」が哲学には可能であるという考えを批判し、哲学の問題を論理学の問題として描きなおすことから出発したが、特権的表象が「言葉」に替わっただけであり、基礎づけ主義は保持したままであった。ローティは、後期ウィトゲンシュタインやクワインやデイヴィッドソンなどを、その点を批判した先駆者として称揚しながら、

私の見るところでは、ラッセルとフレーゲに由来する種類の哲学は、(…) 哲学をカントが望んだような地位——ほかの文化領域の「基礎」に関する特別な知識に基づいて、その領域に裁決を下すという地位——に据えようとするもう一つの試みにすぎない。「分析」哲学はカント哲学のもう一つの変異体、つまり表象を心的なものよりはむしろ言語的なものと考え、「超越論的批判」や心理学よりはむしろ言語哲学を「知識の基礎」を開示する学問と考えることに主たる特徴をもつような変異体なのである<sup>11)</sup>。

として言語論的転回以後の言語哲学は、認識論的転回以後の認識論哲学と同様に、取り下げられるべきものであることを主張する。

### 2.3. 古典的プラグマティズム

ところで、なぜローティのプラグマティズムは、「ネオ・プラグマティズム」と呼ばれているのだろうか。そもそもプラグマティズムとは、20世紀初頭にC・S・パースが提唱した立場である。いまでは、パースのあとに登場したウィリアム・ジェイムズ、ジョン・デューイの3名が、古典的プラグマティストと呼ばれている。本項では、彼らの古典的プラグマティズムと、ローティのネオ・プラグマティズムとを比較するために、古典的プラグマティズムの概要を、ローティとの関連で重要な箇所を簡潔に確認する。

プラグマティズムの創始者として知られるパースは、反デカルト的立場にたって検証主義的な「プラグマティックな格率 (Pragmatic maxim)<sup>12)</sup>」を提唱した。「真理」についてパースは、ある共同体内においていつか来たる時点に、あらゆる議論が交わされ尽くした結果、最終的に考えられる最高度の調和を迎えた際に一致する見解のことである、というヴィジョンをもっていた<sup>13)</sup>。

パースの友人でもあり、アメリカの思想界隈に「プラグマティズム」を広めたジェイムズは、パースの「プラグマティズム」から検証主義と可謬主義を引き継ぎつつ、独自の解釈で紹介した。ジェイムズはパースのように、検証の範囲を経験的な概念だけでなく、「真理」や「価値」といった抽象的な概念にまで広げた<sup>14)</sup>。ジェイムズによる「真理」とは、マーフィーとローティが簡潔にまとめたものによると、「われわれの思考において真であるものは、信念自らが善であることを証明でき、また、明確な特定できる理由から善である信念の産物である<sup>15)</sup>」という。さまざまある信念の中でも、ほかの信念よりも信じたほうが人生にとってよりよい信念のことを、ここでは「真理」といっている<sup>16)</sup>。

デューイの思想は、以上のパースとジェイムズの考えを、「プラグマティズム」という新しい哲学潮流として捉え、独自の解釈で哲学史上に位置づける歴史主義から始まる。デューイにとって上の意味での「プラグマティズム」とは、知識の確実性の基礎づけについて論じられてきた営みを「西洋哲学史」として捉えたうえで、「プラグマティズム」はそれへの反駁としての新しい思想と位置づけることができる、というものである。デューイもジェイムズ

に倣って、そういった基礎づけ主義的な真理観に反意を示す。デューイの真理観は「保証つきの言明可能性の獲得」と呼ばれる。「①われわれは不確定状況を目の前にし、②問題設定を行い、③仮説を形成し、④その帰結を演繹し、⑤演繹結果をテストすることで仮説を検証する<sup>17)</sup>」という手順で、探究を行い、仮説が問題解決に有効であることが検証された状況が「保証つきの言明可能性の獲得」である。この過程は仮説が有効かどうかのテストであると同時に、承認の過程でもある。デューイは、社会の規則や道徳的判断の是非などの仮説も、以上の検証過程を経て一般に承認されるとし、このシステムを「民主主義 (democracy)<sup>18)</sup>」と呼ぶ。

以上、古典的プラグマティズムと呼ばれる思想を簡単に確認した。ローティは、彼らのプラグマティズムのうち、ジェイムズとデューイは賞賛するが、パースについては「プラグマティズムへのパースの貢献は、彼がそれに名称を与えることでジェイムズを刺激したということにすぎない<sup>19)</sup>」と述べ評価をしない。

以上をまとめると次のように言うことができる。ローティのネオ・プラグマティズムは、古典的プラグマティズムから、「真理」についての可謬性や検証主義のほか、ジェイムズから多元論、デューイから歴史主義、「民主主義」などを引き継いでいる。しかし、クワインやデイヴィッドソンなどによる分析哲学の影響も強く受けている、ポストモダンの文脈と結びつけて考えているなどの点で、古典的プラグマティズムと異なっている。また、ローティは、デューイの「民主主義」を自文化中心主義と結びつけ、科学の確実性すら棄て、古典的プラグマティストの誰よりも、相対的な立場へと歩を進めた。

#### 2.4. クワイン、デイヴィッドソン

本項では、ローティが影響を受けた分析哲学者の中でも、特にクワインとデイヴィッドソンの思想についてローティとの関連で重要な点を確認する。

今まで見てきたように、ローティのネオ・プラグマティズムは、万学の女王としての認識論や言語論哲学に対する批判として展開された。ここでいう言語論哲学は、前期ウィトゲンシュタインと、その思想から派生して生まれた論理実証主義が担っている部分が多くある。

クワインは知識の全体論の立場から、論理実証主義の持っていた分析哲学的な基礎づけ主義の残渣を徹底的に炙り出した。論理実証主義はさまざまな批判に晒された<sup>20)</sup>。特にクワインの「経験主義の二つのドグマ」(1951)における批判は、強力なものだった。クワインはその論文の中で、経験的言明や命題が仮説として検証される場合は、個別に検証されるのではなく、その経験的言明や命題が受け入れられる前に構築されていたその人の仮説的信念のネットワークや言明のシステムごと検証されるのであるといい、これを(知識の)全体論(holism)<sup>21)</sup>として提唱した。

また、クワインは「ことばと対象」という論文において、「翻訳の不確定性」という重要な考えを提示している<sup>22)</sup>。クワインのこういった論理実証主義に批判的な考え方は、彼の教え子であるドナルド・デイヴィドソンによって、一部敷衍され、一部批判的に継承された。

デイヴィドソンは、クワインの翻訳の不確定性の議論に基づいた「根本的解釈(radical interpretation)<sup>23)</sup>」を導出し、そこから対応説と対置される斉合説を引き出す。デイヴィドソンが述べる意味での斉合説は、信念<sup>24)</sup>を保証するのは、別の信念だけである、つまり、信念は外的な何ものにも基礎づけされるものではなく、感覚経験は因果的にしか信念に対して関係をもつことができない、という考えである<sup>25)</sup>。そのような形でデイヴィドソンは、クワイン以上に、感覚経験という考えに役割を担わせない<sup>26)</sup>。そして、「根本的解釈」に基づいて、信念の集合全体におけるほとんどの信念は真である、しかし、一部が偽である可能性は拭うことができない、と考える。

以上、クワインとデイヴィドソンの思想を簡単にまとめた。クワインの思想は、デューイ以降、論理実証主義の抬頭によって下火になっていたプラグマティズムの思想を、蘇らせたものとして捉えられることが多い。ローティのネオ・プラグマティズムも、クワインの全体論的な要素と、「翻訳の不確定性原理」、およびそれを敷衍したデイヴィドソンの「根本的解釈」の考え方に大きな影響を受けている。また、デイヴィドソンは、クワインのホーリズムに対して、「図式と内容の二元論」批判を行い、「翻訳の不確定性原理」を解釈全般に拡張した「根本的解釈」に基づいた「斉合説」の立場を提唱する。ローティは、デイヴィドソンのクワイン批判と「斉合説」を、「(…)デ



イヴィドソンの教説は、プラグマティズム、つまり、二元論の正体暴露とそれが生み出した伝統的諸問題の解消とを専らにしてきたある運動を、想起させる<sup>27)</sup>と述べ、自身の論の主要な骨組みの一つとする。ローティがデイヴィドソンらの論をどのように敷衍したかは、次の項に譲る。

## 2.5. 解釈学的転回、自文化中心主義

さて、ローティはクワインやデイヴィドソン、後期ウィトゲンシュタインなどの思想を、ローティが哲学史上で発生としたとみる2つの転回に、共通して保持されていた「自然〔本性〕の鏡」としての「心」というイメージを棄て去る方向性のものであるとみて、これを援用し、『哲学と自然の鏡』の中で反基礎づけ主義を展開する。そして、2つの転回批判の結論として、3度目の転回、すなわち「解釈学的転回」の必要性を説く。

ローティの述べる「解釈学的転回」とは、「認識論哲学」や「言語論哲学」にとって代わる転回の名前ではない。それらの、「自然〔本性〕の鏡」について探求することで、すべての知識や学問に基礎づけを与えうる「万学の女王」の座につこうとする学問から脱却し、自文化中心主義的な立脚点から他者と「会話 (conversation)<sup>28)</sup>」をすることで解釈し、自己を絶えずバージョンアップしてゆく、そうした活動の名前である。ローティによると、解釈学的転回の中の社会においては、哲学も科学もほかのいかなる学問も同列の存在となるという。また、それぞれの「会話」の中で用いられているボキャブラリーや、学問・知識はそれぞれ共約不可能であり、それぞれの「会話」のなかで設定された「強制によらない合意」に基づいてその信憑性が決定されるという。われわれは同じ「会話」を共有する個々の共同体に複数属しており、その共同体によってそれぞれの「強制によらない合意」に基づいた真理観をもっている。ローティは「客観性」について、「(…)「客観性」の観念を「強制によらない合意」の観念と取り換えること<sup>29)</sup>」を望んでいると述べる。そして続けて、客観的真理の要件は間主観的合意であるとも述べる<sup>30)</sup>。ローティにとっての「会話」という概念は、その「会話」(もしくは言語ゲーム)内の間主観的な合意が必要なのである。つまり、「各人が物語を勝手に語ればいいわけではないことだ。語られた物語は、対話を通して合意されなくて



はならない<sup>31)</sup>」という。ローティはこれについて、「私たちプラグマティストが望んでいるのは、客観性を連帯に還元することである<sup>32)</sup>」と述べている。

しかし、異なる「会話」におけるボキャブラリーが共約不可能である以上、「さしあたって歴史的な限定のもとにある自分たちの文化を中心に物事を判断する『自文化中心主義 (ethnocentrism)』から出発せざるをえない<sup>33)</sup>」とローティはいう。これは、われわれは何かを言ったり語りかけたりする際には、自分が属している共同体で、現在そうだとされていることを言うしかないということである。歴史のいまの時点で自分たちが信じていることを起点とした「会話」を続けることで、「われわれ」の範囲を拡張していくことが、われわれのすべきことであるという。

ここでローティのネオ・プラグマティズムについてまとめてみたい。ローティは、パースら古典的プラグマティストから、可謬主義や検証主義などを踏襲している。しかし、古典的プラグマティストたちや、分析哲学の中でもとりわけクワインやデイヴィドソンから、意味や真理についての多元論を継承し、それを哲学や科学のみならず、全ての知的活動を等価値と考えるところまで拡張した点は、ローティ独自の考えである。特にローティは「真理」の扱いについてこだわっており、将来的に「真理」は収束する、と考えたパースについては評価をせず、ジェームズやデューイ、クワインやデイヴィドソンを積極的に援用しつつ、限りなく相対主義に近い形の自文化中心主義を主張する。

岡本によると現代の思想史において、パトナムとローティは異なったプラグマティズムの戦略をとっていることが指摘されている<sup>34)</sup>。岡本は、パトナムの戦略には「パース型プラグマティズム (〈探求の終着点型プラグマティズム〉)」、ローティの戦略には「ジェームズ=デューイ型のプラグマティズム」と名づけている。このふたつの戦略の違いを簡潔に説明すると、ギリシア哲学や認識論哲学にみられる、「普遍なるもの」を探求する態度に対して反対する立場であることは共通しながらも、パトナムは前者であり、客観性について、バーンスタインがいうところの「プラグマティックに説明する」こと<sup>35)</sup>をあきらめない立場である。後者は、「経験」、「真理」、「客観性」などの概念を完全に捨て去った立場である。ローティの戦略は後者である。ローティは、後者に立ち、極端な多元論である自文化中心主義と、将来的に一致が見込ま

れない、終わりなき「会話」の続く社会を希望と標榜する解釈学的転回の必要性を説く。

### 3. ローティへの反駁

以上のようなローティの主張にはさまざまな反駁がよせられた。次項から、プラグマティズム以外の筋とプラグマティズムの内側から、それぞれ寄せられた批判の中でも主だったものを取り上げる。

#### 3.1. プラグマティズム以外からの批判

まずよく知られているものとして、テリー・イーグルトンによる批判をあげることができる。イーグルトンはローティをポストモダン的な相対主義者として捉えて、「ポストモダニストは相手の思想的足元をすくったつもりでいながら、自分の足元まで危うくしてしまっている。(…) 貧弱な現実主義」と批判している<sup>36)</sup>。反基礎づけ主義と反本質主義的な論によって、本質的な論証的土台はないと訴えていながら、自分自身の立場を例外視している点は、イーグルトンのほかにも多くの論者から指摘されている。

イーグルトンと違う観点からの批判として、魚津のものを挙げるができる。魚津は、ローティのパスを評価しない「ジェイムズ＝デューイ型のプラグマティズム」に対し、プラグマティズムを一面的にしか理解していないとして批判を行う。ローティのパス批判は、真理の収束説に向けられている。しかし、魚津によるとそれはパスの誤った理解に基づいたものであり、また、ローティは積極的にジェイムズとデューイの論を援用するが、パスの考え方を抜きにして2人の論を用いるのは、プラグマティズムの一面的な理解にすぎないのではないか、という指摘をする<sup>37)</sup>。

#### 3.2. プラグマティズム内部からの批判

続いてプラグマティズム内部から起こった、ローティへの反駁を確認する。

まず、ローティとヒラリー・パトナムの論争を取り上げる。パトナムはロー

ティとの論争の中で、以下のような旨のやり取りをしている。ローティは、彼の立場ではファシズムなどの忌避すべき立場を斥けられないという指摘に対して、何らかの「真理」に訴えることが適わないため、プラグマティストは人々にファシストになってはいけないことを説くことができないことは認めている<sup>38)</sup>。しかし、「合理性を市民的教養性 (Civility) と見るプラグマティズムの見方からすれば、探究とは、個々の問題に基準を適用することではなく、むしろ、信念の綱目を絶えず編み直すことである<sup>39)</sup>」とローティは述べている。しかし、このように、ローティはファシズムの是非のような問いを、「今・ここ」におけるわれわれではなく、将来的に教育がなされ洗練されたリベラルな、より良いわれわれが判断するものであるとする<sup>40)</sup>。また、ローティは「われわれプラグマティストは真理論を持っていない<sup>41)</sup>」といいながら、「われわれ (… ) が望んでいるのは、『客観性』の観念を、『強制によらない合意』の観念と取り換えることである。われわれは文化全体を、同じ認識論的水準に置きたいと思っている。(… ) 強制によらない合意があれば、『客観的真理』であるための要件がすべて与えられたことになるからである。その要件とは、間主観的合意である<sup>42)</sup>」とも述べている。こうしたあくまで自分が所属している集団に論拠を見出すローティの見解についてパトナムは、自文化中心主義とはいうが実質のところ文化帝国主義<sup>43)</sup> でしかないという批判を加えている。

ローティよりも後の世代のプラグマティストからの批判として、シェリル・ミサックやジョン・マクダウェルなどによる批判があげられる。ミサックはローティの論について、「ローティは、主張について判断を下す局所的でないいかなる方法も、私たちは自分の信念を改善するかもしれないという考えを理解するいかなる方法も、残してはくれない。(… ) ローティは (… ) ナチスに加担した権威主義的法哲学者のカール・シュミットのような連中に対して何も言い返せなくなる」と述べ、続けて「ひとたび真理を目指すことを放棄すれば (… ) 力を持つ者こそ正しいという考えに反論する手立てを失ってしまう」という<sup>44)</sup>。ミサックのような後続のプラグマティストたちも、ローティほど「客観性」を認めない立場について、懸念を示している。

懸念を示す一人であるマクダウェルは、上で取り上げたものとは違う箇所

で、パトナムに対してローティが、言語ゲームの外側の観点と内側の観点を何らかの仕方で一つにするような観点から批判を加えたことについて、パトナムと足並みをそろえて批判を行う。ローティはデイヴィドソンに対して、「二元論の正体暴露とそれが生み出した伝統的諸問題の解消とを専らにしてきた運動<sup>45)</sup>」としての「プラグマティズムの最も優れた、もっとも純粋な代表者(…)はデューイとデイヴィドソンである<sup>46)</sup>」と述べている。そして、デイヴィドソンの「根元的解釈」を独自に解釈し、それをもとにパトナムに対して、言語ゲームの外側と内側をあわせた「神の視点」を欲しているとして批判を行う<sup>47)</sup>。これについてマクダウェルは、「自然」を「法則の領界(the realm of law)<sup>48)</sup>」と同一視した、「理性と自然の二元論<sup>49)</sup>」を採用している点をデイヴィドソンの弱点であると指摘し、またローティもデイヴィドソンについて、「理性と自然の二元論」を中心に据えた解釈を展開している点を指摘し、これを伝統的哲学のもっていた基礎づけ主義的傾向への有力な反駁であるとして賞賛し、自身の論の中心に据えた<sup>50)</sup>。それについてマクダウェルは、プラグマティズムを「二元論の正体暴露」としての運動と捉えていたローティであったが、「ところが、ローティ自身の思考は理性と自然の二元論を中心として構成されているのだから、これは要するに、ローティは自身の言う意味でのプラグマティストたることにせいぜい部分的にしか成功できていない<sup>51)</sup>」と述べている。マクダウェルは『心と世界』の中で、長くページを割いて、デイヴィドソンの問題の立てつけは、理性と自然の二元論を採用している点で、当初の目的を果たせていない点を批判した。ローティは、そんなデイヴィドソンの論の、マクダウェルが弱点であると指摘した部分をピンポイントで絶賛し、理性と自然の二元論をより一層強める形で解釈・採用したのである。この点をマクダウェルは、ローティのプラグマティズムは中途半端であると指摘し、パトナムもこの点について、「内部の発話と『外部』の発話に二分する習慣は、反プラグマティスト」であると述べている<sup>52)</sup>。

### 3.3. ローティの難点

以上、ローティに寄せられた種々の批判のうち、主だった論点を取り上げた。プラグマティズム以外からの批判としては、①反基礎づけ・反本質主義

を掲げていながら、自身の論は例外視している点、②パースを評価しないのは、プラグマティズムの理解として一面的なものに過ぎない点が指摘された。また、プラグマティズムの内部からは、③文化帝国主義的な相対主義であるという点、④プラグマティズムは二元論暴露をする運動であるとしていながら、ローティ自身、理性と自然の二元論を論の中心にすえており、プラグマティズムとして中途半端である点が指摘された。これらの批判は連続したものである、と考えることができる。ローティは万学の女王としての学問への反省から、ジェイムズやデューイ、分析哲学などに準拠し、客観性や真理などの概念をすべて放擲した。しかし、ローティは客観性や真理を放擲することに執着したために、魚津が指摘するようにパースを一面的な解釈で批判してしまったし、マクダウェルが指摘するように、デイヴィドソンの思想に根付いた二元論だけは見逃して、その点を強調する形で自らの論の骨子とした。そういった、マクダウェルやパトナムが指摘する「中途半端なプラグマティズム」を遂行した結果、①や③で指摘されたような立場が撞着したのである。

ローティの中途半端さは、以上の点だけに見られるものではない。パトナムがローティに対して、文化相対主義者ではなく文化帝国主義者であると非難した際に、パトナムがローティから感じ取っていたものも、ローティの中途半端さに起因しているとみることができる。ローティは、デイヴィドソンから援用した二元論を敷衍し、言語ゲームの内側の観点と外側の観点到同時に立つような、「神の視点」に立つことはできないと主張するが、その二元論を採用し続けている限り、その物言い自体が「神の視点」からのものであるように映ってしまう。それはローティが、私たちという共同体内において、「強制のない合意」と「客観性」を挿げ替えることで、境界線をあやふやにしているためである。ローティの述べる「強制のない合意」は、終わりのない会話によってなされるものであり、どのような状態なら合意形成がなされているのか、十分に説明がなされていない。これは、ローティがデューイの「民主主義」を援用して主張した点であるが、パトナムにとってローティが「民主主義者」ではなく「文化帝国主義者」に見えてしまったのは、まさにその曖昧な点によるのである。

## おわりに

以上、ローティの思想とそれへの批判を確認した。ローティは古典的プラグマティストや、伝統的な西洋哲学の真理観に懐疑的な分析哲学者たちの、可謬主義的・全体論的・多元論的な主張を援用し、自分の今いる状況以外の立場の一切を斥ける自文化中心主義と、終わりなき「会話」の続く社会を希望と標榜する解釈学的転回の必要性を説いた。

こうしたローティの思想に、多くの批判が寄せられた。しかし、ローティの思想は、自分の外側の立場を認めない自文化中心主義であるため、批判の多くを受け付けなかった。そんな中、ローティの後続のプラグマティストたちは、ローティのネオ・プラグマティズムの方法論的な内部批判を行っていた。そして、ローティが批判したような伝統的な認識論哲学の絶対主義的立場は採れないにしても、ローティの極端な相対主義的多元論を回避し、バーンスタインの言葉を借りると、「客観性をプラグマティックに説明する」第3の道を探る探求が取り組まれている。現在、代表的な第3の道を探る哲学者として、ローティの後継者として見られているロバート・ブランダムや、同じくピッツバーグ学派のマクダウェルを挙げることができる。ブランドムは語用論において、マクダウェルは自然主義の立場から、ローティが棄て去った「真理」および「客観性」の概念を見出そうとしている。これらの試みについては、現在、評価が待たれるところである。

### 参考文献

テリー・イーグルトン 森田典正 / 訳『ポストモダニズムの幻想』大月書店  
1998

石田正人 伊藤邦武『プラグマティズム入門』ちくま新書 2016

石田正人「C・S・パースの真理の収束説」『科学哲学 45 卷 1 号』日本科学  
哲学会 2012

魚津郁夫『現代アメリカ思想 プラグマティズムの展開』放送大学教育振興会  
2001

大賀祐樹『リチャード・ローティ リベラル・アイロニストの思想』藤原書

店 2009

- 岡本裕一朗『ネオ・プラグマティズムとは何か』ナカニシヤ出版 2012
- W・V・O・クワイン 大出晃・宮館恵 / 訳『ことばと対象』勁草書房 1984
- W・V・O・クワイン 飯田隆 / 訳『論理的観点から』勁草書房 1992
- 丹治信治『現代思想の冒険者たち 19 クワイン ホーリズムの哲学』講談社 1997
- ドナルド・デイヴィッドソン 清塚邦彦・柏端達也・篠原成彦 / 訳『主観的、間主観的、客観的』春秋社 2007
- 富田恭彦『ローティ 連帯と自己超克の思想』筑摩選書 2016
- C・S・パース W・ジェイムズ J・デューイ / 著 上山春平 山下正男 魚津郁夫 / 訳『世界の名著 第 48 パース、ジェイムズ、デューイ』中央公論社 1968
- リチャード・J・バーンスタイン 廣瀬覚・佐藤駿 / 訳『哲学のプラグマティズム的転回』岩波書店 2017
- ヒラリー・パトナム 関口浩喜・渡辺大地・岩沢宏和・入江さつき / 訳『存在論抜き倫理』法政大学 出版局 2007
- ヒラリー・パトナム 高頭直樹 / 訳『プラグマティズム——限りなき探求——』晃洋書房 2013
- ジョン・マーフィー リチャード・ローティ / 共著 高頭直樹 / 訳『プラグマティズム入門 パースからジェイムズまで』勁草書房 2014
- McDowell John, Mind and World (Harvard University Press, Cambridge, Mass., 1994; reissued with a new introduction, 1996) ジョン・マクダウェル 神崎繁・河田太郎・荒 畑靖宏・村井忠康 / 訳『心と世界』勁草書房 2012
- ジョン・マクダウェル 大庭健 / 監訳『徳と理性』勁草書房 2016
- 松枝啓至『懐疑主義』京都大学学術出版会 2016
- シェリル・ミサック 加藤隆文 / 訳『プラグマティズムの歩き方 上巻 21 世紀のためのアメリカ哲学案内』勁草書房 2019a
- シェリル・ミサック 加藤隆文 / 訳『プラグマティズムの歩き方 下巻 21 世紀のためのアメリカ哲学案内』勁草書房 2019b



Rorty Richard, *Philosophy and the Mirror of Nature*, (Princeton University Press, 1979) リチャード・ローティ 野家啓一 / 監訳『哲学と自然の鏡』産業図書 1993 第4版

Rorty Richard, *Consequences of Pragmatism: Essays, 1972-1980*, (University of Minnesota Press, 1982) リチャード・ローティ 室井尚・吉岡洋・加藤哲弘・浜日出夫・疋茂 / 訳『哲学の脱構築 プラグマティズムの帰結』御茶の水書房 1994

Rorty Richard, *Pragmatism Davidson and Truth* (1986) など他6篇 リチャード・ローティ 富田恭彦 / 訳『連帯と自由の哲学—二元論の幻想を超えて—』岩波書店 1988

Rorty Richard, *Philosophy as a Cultural Politics philosophical papers volume4* (Cambridge University Press, 2007) リチャード・ローティ 富田泰彦・戸田剛文 / 訳『文化政治としての哲学』岩波書店 2011

渡辺幹雄『リチャード・ローティ ポストモダンの魔術師』秋春社 1999

## 註

- 1) [Rorty 1979] p.9-13 邦訳 pp.28-32
- 2) [大賀 2009] p.58
- 3) [Rorty 1979] pp.4-5 邦訳 p.22
- 4) こうした認識論哲学の見方はローティの独自のものである。
- 5) [ローティ 1992] p.481 この「人間の鏡(ガラス)のような本質」をローティは、シェイクスピアの「尺には尺を」をから引用する。「尺には尺を」では、「人間の鏡(ガラス)のような本質」は、神の姿を写し出すため人間の内なる鏡として登場する。すなわち、客観的な実在を写し出す「自然〔本性〕の鏡」は、哲学的な教説ではなく、デカルトの登場するずっと前から人文学の書物の中にたびたび見いだされるメタファーなのであるという。[同上]
- 6) ローティが自身の本のタイトルに用いた「自然の鏡」に、執筆者が分かりやすさのため「本性」を〔 〕内につけたした。註の5も参照。
- 7) [Rorty 1979] p.7 邦訳 p.25

- 8) [大賀 2009] pp.52-53 なお、その理由として大賀は、以下のように述べている。「ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の結論部分における有名なテーゼ、『語り得ぬものについては沈黙しなければならない』という言葉が表しているように、哲学における思考から、曖昧な形而上学や認識論の用語の使用を追放し、厳密な論理分析によって哲学的な問題を解決しようとしたのが二十世紀前半の言語哲学であり、またその議論が継続されているのが『分析哲学 (…)] という学問フィールドだからである」。[同上]
- 9) [Rorty 1979] p.257 邦訳 p.295
- 10) [Rorty 1979] p.258 邦訳 p.296
- 11) [Rorty 1979] p.8 邦訳 p.26-27
- 12) プラグマティズムの格率については、[パース 1968] p.68 を参照。パースがここで述べているのは、命題の意味は検証方法である、という検証主義的な考えである。
- 13) これを真理の収束説と呼ぶ。
- 14) この点は、伝統的な西洋哲学が保持していた、事実的なものと価値的なものの二分法への反駁でもある。ジェイムズは、この二つについて、明確に分けられているわけではなく、等しく検証的な態度によって追求されるべきである、という姿勢をとる。
- 15) [マーフィー 2014] p.108
- 16) ジェイムズは、ある観念が「真」となる場合、それは道具的な場合に限りされるとみている。道具的というのは、「真理」の探究の過程で、ある観念を一時的に「真理」であるとして信じたほうがよい場合、その観念は「真理」となるのであり、時が経って探求が進み、これまで「真理」とされてきた観念に誤りが認められた場合、ほかの信じたほうがよい観念が「真理」として採用される、ということを示している。その意味でジェイムズは可謬主義の立場にたつ。
- 17) [伊藤 2016] p.105
- 18) [伊藤 2016] p.109
- 19) [Rorty 1982] p.161 邦訳 p.360

- 20) 後期ウィトゲンシュタインは『哲学的探究』の中で、言語の機能は『論理哲学論考』で想定したような中立的な観点から世界を写像することに終始するのではなく、人々の実践から切り離すことのできない、「慣習」によって規則づけられた「言語ゲーム」として成り立つものである、と主張した。
- 21) これは、「外的世界についてのわれわれの言明は、個々独立にではなく、一つの集まりとしてのみ、感覚的経験の審判を受けるのだ」([クワイン 1992] p.61) というテーゼに集約される。
- 22) 翻訳の不確定性については、[クワイン 1984] を参照。ここにおけるクワインの指摘は、異なった言語間の共約は不完全な形でしかおこなうことができない、という点が肝である。
- 23) 「根本的解釈」はクワインの「翻訳の不確定性」を敷衍した考え方であり、「翻訳の不確定性」においても働いている「善意の原理」が核となっている。これは、「未知の言語を翻訳する時、あるいは自他の発言を解釈する際、翻訳者・解釈者は相手の信念のかかなりの部分が自分の信念と一致するように翻訳・解釈する」([松枝 2016] p.pp.156-157) というものである。根本的解釈に含まれる「善意の原理(Principle of Charity)」は、その発動を選択できるものではない、とデイヴィドソンは述べる。つまり、他者の発言を解釈しようとする者は、その出発点において、被解釈者の抱いている信念の大部分が正しいと考えるほかないのである。
- 24) ここでの信念とは、「意図や欲求や感覚器官をそなえた人々の状態」であり、「それらを抱いている人々の身体の内部や外部の諸々の出来事によって引き起こされたり、あるいはそれらの出来事を引き起こしたりする状態」のことである ([デイヴィドソン 2007] p.220)。
- 25) デイヴィドソンは、感覚経験が信念に因果的にしか関係をもちえないという点について、「感覚は一定の信念を引き起こす原因であり、その意味において、それらの信念の基礎、あるいは根拠である。しかし、信念に関する因果的な説明は、その信念が正当化される仕方や理由をあきらかにするものではない」([デイヴィドソン 2007] p.227) と述べる。
- 26) デイヴィドソンは、「経験主義の第三のドグマ」として、クワインが保

持していた「図式と内容の二元論」を否定する。図式と内容のどちらの指定物も採用しないのがデイヴィドソンの斉合説である。

- 27) [Rorty 1986] p.333 邦訳 p.217
- 28) 「対話 (dialogue)」ではなく、オークショットに由来する「会話」という概念を使用したのには理由があるという。「対話」は、(…)「二つのロゴス」が互いに意見を闘わせながら、それらが弁証法的に統一され、「唯一の真理」へと到達するための方法である。それに対して「会話」はラテン語の“conversari”、すなわち「共に生きること」に語源を有しているように、言語的实践を通じての共生を意味している。[ローティ 1993] p.488
- 29) [ローティ 1988] p.10「日本語版によせて」から引用
- 30) 同上ただし、ここで言っているのは「間主観的合意イコール客観的真理」ということではなく、あくまで「客観的真理の要件が間主観的合意である」ということである。[岡本 2012] p.69
- 31) 前掲書 p.70
- 32) [ローティ 1988] p.13「日本語版によせて」から引用
- 33) [ローティ 1988] p.10「日本語版によせて」から引用
- 34) [岡本 2012] p.78
- 35) バーンスタインのいう「客観性をプラグマティックに説明する」ことは、「①客観性を社会的な正当化の実践とむすびつけ、②正当化と真理を区別し、③悪しき相対主義や規約主義を悩ます自己論駁のアポリアを回避しながら、客観性を」説明することであるという ([バーンスタイン 2017] p.167)。
- 36) [イーグルトン 1998] p.45
- 37) [魚津 2001] p.237 からの議論を参照。
- 38) [Rorty 2007] p.31-32 邦訳 p.50
- 39) [ローティ 1988] p.14「日本語版によせて」から引用
- 40) [岡本 2012] p.76 などを参照。
- 41) [ローティ 1988] p.11「日本語版によせて」から引用
- 42) [ローティ 1988] pp.9-10「日本語版によせて」から引用

- 43) パトナムは、ローティから文化帝国主義的にアメリカ的な尺度で世界を捉えることが可能だ、という傲慢さを感じ取っていたのである。[パトナム 2007] p.145 を参照。
- 44) [ミサック 2019b] p.175
- 45) [Rorty 1986] p.333 邦訳 p.217
- 46) [マーフィー 2014] p.9
- 47) [Rorty 1986] (邦訳:『連帯と自由の哲学』「プラグマティズム・デイヴィドソン・真理」) や、[McDowell 1996] p.129-161 (邦訳 pp.211-261) における議論も参照。
- 48) 近代自然科学の成立以降に隆盛した、脱魔術化した「自然」の領域は、「自然」を「意味」の含まれない、自然科学で捉えることのできる物質的な法則のみで構成された空間ととらえる見方である [McDowell 1996] p. 邦訳 pp.320-321 の原注 2 も参照。
- 49) 近代自然科学の成立以降、デカルトなどによって脱魔術化され、意味から引きはがされた機械論的な自然の領域である「法則の領界」と、それと対比的な、信念や知識などの論理的なものの領域である「理由の論理空間」の二元論を指す。
- 50) [McDowell 1996] p.154 (邦訳 p.250)
- 51) [McDowell 1996] p.154 (邦訳 p.250)
- 52) [パトナム 2013] p.86